

あめ ま 雨にも負けず

みやざわ けんじ
宮沢 賢治

37歳の若さで、肺炎で亡くなった宮沢賢治。
亡くなる直前に手帳に書き留めたこの詩は、彼の死後に発見され、発表されました。

あめ ま
雨にも負けず
かぜ ま
風にも負けず
ゆき なつ あつ ま
雪にも夏の暑さにも負けぬ
じょうぶ からだ
丈夫な体を持ち
よく
欲はなく
けっ
決して いからず
しず わら
いつも静かに笑っている

にち げんまい し ごう
一日に玄米四合と
み そ すこ やさい た
味噌と少しの野菜を食べ
あらゆることを
じぶん かんじょう い
自分を勘定に入れずに
よく見聞きし 判り
そして忘れず

玄米四合の読みは、「しごう」？「よんごう」？
原作に振り仮名はなく、朗読音声もないため、賢治本人がどちらのつもりだったかは不明だそうです。
しかし、「四」という字は、古典的には四季、三寒四温、四十九日など「し」と読むのが基本とのこと。
玄米四合も「しごう」と仮名を振りました。



のはら まつ はやし かげ
 野原の 松の林の 蔭の
 ちい かや こや い
 小さな 茅ぶきの小屋に 居て
 ひがし びょうき こども
 東に 病気の 子供 あれば
 い かんびょう
 行って 看病 して やり
 にし つか はは
 西に 疲れた 母 あれば
 い いね たば お
 行って その 稲の 束を 負い
 みなみ し ひと
 南に 死に そうな 人 あれば
 い こわ い
 行って 怖がら なくとも いい と言 い
 きた そしょう
 北に ケンカや 訴訟 があれば
 や い
 つまらない から 止めろ と言 い

宮沢賢治は農業の指導者
としても熱心に活動して
いました。

「寒さの夏」とは・・・
東北地方で、夏に冷たい
北東の風（やませ）が
吹いて冷夏となること。

ひ で とき なみだ なが
 日照りの 時は 涙を 流し
 さむ なつ ある
 寒さの 夏は オロオロ 歩き
 よ
 みんなに デクノボー と呼ばれ
 ほ く
 褒められもせず 苦にもされず
 もの わたし
 そういう 者に 私は なりたい